（8）総合研究（卒業課題）〔4年〕

チームテーマと指導教員一覧（A・B共通）

チームテーマ番号・チームテーマ		担当者（☆はコーディネーター）および指導可能テーマの一例		
1	適応行動の認知的・身体的メカニズム	千葉智則	☆	運動・スポーツ生理学（トレーニング、高温環境、身体組成）
		加藤健二		日常行動の認知心理学的分析（食行動、空間行動など）
		吉田雄大		スポーツのパフォーマンス分析（運動学的分析、トレーニング分析、ゲーム分析）
2	心身の健康と行動	金井嘉宏	☆	行動科学と認知科学に基づく臨床心理学
		東海林渉		病い、障害、健康に関する心理学的研究（病いの語り、障害への適応、ピアサポート等）
		堀毛裕子		心身の健康と適応（ストレス、対人関係、ポジティブなパーソナリティ特性など）
3	発達と社会的行動	福野光輝	☆	対人葛藤の社会心理学
		萩原俊彦		自己形成、進路選択、動機づけ、学習に関する心理学的研究
4	日本社会の変化とライフスタイル	神林博史	☆	日本社会における不平等（職業、学歴、ジェンダー、家族など）
		小林裕		組織と人間（人的資源管理、リーダーシップ、職務態度など）
		仙田幸子		現代日本社会における家族・人口・就業
5	学びの文化	黒須憲	☆	運動文化としてのスポーツ・武道　―運動会からオリンピックまで―
		水谷修		生涯の学びと遊び―支援システム・学校と地域の協働・まちづくり
6	さまざまな人間の成長と支援	坪田益美	☆	社会系教科の教育・カリキュラム・内容論、学校教育、市民社会論
		泉山靖人		学校教育と生涯学習に関わる社会制度、学びの情報基盤
		平野幹雄		臨床発達学（発達障害児、震災後の気になる子の理解と心理的な支援、特別支援教育）
		清水貴裕		教育臨床、学校カウンセリング、教育相談
		大迫章史		子どもの学力やカリキュラムに関する教育行政
7	人間とスポーツ	岡崎勘造	☆	運動、食事、睡眠の生活習慣に関する調査研究
		坂本譲		運動・ストレス・生活習慣と健康、免疫（運動免疫学、健康科学的探求）
8	文化のしくみと解析	信太光郎	☆	近・現代の哲学思想、生命、技術、言葉、芸術をめぐる問い
		小林睦		応用倫理学（生命倫理、環境倫理、情報倫理ほか）、現象学、心の哲学、映画論
		津上誠		家族、性、衣食住、交換、世界観等に関する異文化の内省的考察
		文景楠		西洋古代哲学史、英米圏の現代哲学（言語哲学、存在論、行為論など）
9	中韓の言語文化	金亨貞	☆	韓国語学・韓日対照言語学（統語論及び意味論）、韓国朝鮮語教育論
		金永昊		日韓比較文学、韓国文化論
		塚本信也		中国文化論（文学、語学、歴史、神話、芸能など）
		松谷基和		韓国・朝鮮の歴史と政治、朝鮮半島をめぐる国際関係
		楊世英		中国語学および日中両国における社会構造変化
10	日本の言語文化	佐藤真紀	☆	日本語教育、バイリンガル教育、多言語多文化共生、実践研究
		原貴子		日本文学・日本文化
		房賢嬉		日本語学、日本語教育
11	英語圏の言語文化	ワトソン　スコット	☆	Translation studies, Racism in America, American culture
		秋葉勉		アメリカ文学・文化
12	ヨーロッパの言語文化	門間俊明	☆	ドイツの言語と文化、ポップカルチャー
		佐伯啓		レトリックと言語教育、ドイツの言語と文化、引用句研究
		フリック　ウルリッヒ		歴史学、東アジアとドイツの文化とその比較
		山崎冬太		文学、フランス文化、表象文化、幕末維新期のヨーロッパとの関わり
		2020年度新任教員		西洋美術史、芸術学
13	表現と文化	下館和巳	☆	演劇（舞台製作・俳優修行・戯曲研究）、英国文化・文学、ダンテ
		井上正子		フェミニズム、ジェンダー、クィア批評（文学や映画等の表象文化における性、身体、装い、境界、暴力等）
		宮本直規		ドキュメンタリー映画、フランス語

チームテーマ番号・チームテーマ		担当者（☆はコーディネーター）および指導可能テーマの一例		
14	言語の分析と応用	岸　浩介	☆	英語や日本語を対象とした統語論および意味論
		高橋直彦		日・英語の音形（＝発音）の背後に潜む法則性を突き止める
		坂内昌徳		第二言語習得研究、英語教育
15	情報科学の基礎数学	佐藤　篤	☆	離散的な幾何学とその応用
		小林善司		数え上げ組み合わせ論入門
		石田弘隆		代数多様体に関連する幾何学とその応用
16	情報科学と現象の数理	星野真樹	☆	フーリエ解析とその応用
		岩田友紀子		確率論・実解析・関数解析など解析学全般
17	情報科学と生命のメカニズム	松尾行雄	☆	音響情報処理とその応用に関する研究
		土原和子		生物における情報の受容機構の解明・ゲノム情報解析
		牧野悌也		生き物の情報処理メカニズムの解明とモデル化
18	コンピュータシステムの構築	菅原　研	☆	うごくものをみる、かんがえる、つくる
		武田敦志		生活を支える情報処理システムの設計と開発
19	情報技術を活用した社会の課題解決	坂本泰伸	☆	インターネットを活用したソフトウェアシステムの設計と開発
		村上弘志		天文学に関連した教育用・研究用アプリケーションの開発
		高橋秀幸		IoT（Internet of Things）システムの設計と開発
20	人の暮らしと自然環境	平吹喜彦	☆	みどりと景観から環境保全、森林文化、地域づくりを考える
		柳澤英明		地域づくりから災害に強いまちづくりを考える
21	地域の経済と文化	柳井雅也	☆	少子高齢化社会における地域経済の活性化について
		岩動志乃夫		地域資源を活用した産業振興と地域形成に関する地理的研究
22	地域のまとまりとゆらぎ	遠藤　尚	☆	変動する社会経済状況下における地域の生活と文化の諸問題
		高野岳彦		地方都市・農山漁村の生業・産業の変容と地域の持続可能性
		佐久間政広		農山漁村の地域社会における諸問題
23	少子・高齢社会と福祉	菅原真枝	☆	高齢者福祉や障害者福祉を中心とする事例分析と社会学理論の検討
		大澤史伸		NPOについて考える
		増子　正		地域が抱える福祉課題の分析と、課題解決のシステムを考える
24	健康とスポーツの科学	天野和彦	☆	地域スポーツをマネジメントから考察する
		松原　悟		スポーツ科学の観点から地域スポーツ活動について研究する
		高橋信二		こころと身体に良い運動の研究
25	自然資源の保全と地域マネジメント	松本秀明	☆	地域に展開する地形の理解と、災害リスク
		目代邦康		地域資源の評価、コミュニティーを基盤とした保全のあり方
		和田正春		市民力を活かす地域マネジメントの構想と実践の研究
26	情報技術と社会	乙藤岳志	☆	異CPU/異OSでのセキュアネットワーク環境の構築
		伊藤則之		教育や業務を支援するアプリケーションの開発および実用化
		杉浦茂樹		利用者中心のサーバーの企画・設計・構築・運用
		鈴木　努		社会ネットワーク論、社会運動論
27	メディアの文化と産業	小林信重	☆	メディア論、文化社会学
		アンドリューズ　デール		Folklore（民俗学）
28	人文・社会科学データの計量的テキスト分析と活用	松本章代	☆	テキストデータの分析と活用
		片瀬一男		家族・学校から職業への移行の計量社会学

チームテーマの解題と担当教員

注意：各解題の下欄に掲載した推奨論文は、テーマ解題を作成した教員ら（☆は、コーディネーター）が、それぞれのテーマに関連して皆さんの参考になると評価した先輩の論文の一部です。論文を読んでみたい場合は、各教員の研究室を訪ねてみてください。末尾の数字は卒業年度を表します。

1．適応行動の認知的・身体的メカニズム

千葉 智則☆　加藤 健二　吉田 雄大

人間は、刻々と変化する環境の中で適応的に活動するための極めて巧妙なしくみを備えており、それらを用いてより快適に生活しようとする志向性を持っている。

「適応行動の認知的・身体的メカニズム」グループでは、こうした適応行動を支えている認知的あるいは身体的機序を、心理学実験や運動生理学的実験により明らかにすることを目指す。以下に各教員の主な指導内容を紹介する。

千葉：

ヒトは、高温多湿や低酸素濃度といった外部環境の変化に対して恒常性を維持する高い能力を持っている。しかし、そのような外部環境の変化を伴うなかで運動を遂行するためには、恒常性機構と代謝機構に競合が生じていると考えられる。それらの競合が運動パフォーマンスにどのような影響を及ぼすか運動生理学的実験から明らかにし、ヒトが特殊な環境下で運動を行った場合の機能的適応の解明を目指す。

加藤：

同じものを食べても、誰とどこで食べるかによって感じられる「おいしさ」が異なるのはなぜか？高カロリー食品は食べないほうがいいと思っても食べてしまうのは何故？道に迷いやすい人にはどのような特徴があるのか？こうしたありふれた日常行動の背後に、どのような認知的メカニズムが隠れているのかを心理学実験を通して解明することを目指す。

吉田：

運動やスポーツでは、能力の高さや成績の良し悪しをしばしば「パフォーマンス」と表現する。アスリートは自身のスポーツパフォーマンスを上げることを目標に日々トレーニングを行なっている。ところで、パフォーマンスとはどのように定義され、どのように分析されるのだろうか。パフォーマンスの分析方法は様々で、例えば、運動中の動作分析、ゲーム分析、トレーニング効果の分析などが挙げられる。ここでは、運動またはスポーツのパフォーマンスにおけるメカニズムの解明を目指す。

推奨する総合研究論文

1「飲料の色の適切性操作が味評定に及ぼす効果」（中村成美、2016）
2「自己選択した香りが精神的作業のパフォーマンスに及ぼす影響（折笠瑠衣、2018）
3「ガム咀嚼が高強度間欠的運動における生理的、主観的影響」（中村圭吾、2017）
4「大学ラクロス選手における間欠的回復力について」（高坂奎佑、2018）

2．心身の健康と行動

金井 嘉宏☆　堀毛 裕子　東海林 渉

心身の健康と行動は、個人のパーソナリティや自己意識、認知特性、ストレス、対人関係、ライフイベントなど多くの要因を介在して密接に関係しており、これらは人間の適応状態や発達・成長に影響を及ぼしている。このチームでは、３名の教員が心理学の立場から適応や発達・成長に関する観点を踏まえながら、心身の健康と行動をめぐる問題について検討する。

堀毛は、心身の疾患、ストレスや対人関係などの心理的問題や、つらい体験を乗り越えることに資するポジティブなパーソナリティ特性について、臨床・健康・パーソナリティ心理学などの幅広い視点から検討する。

金井は、社会生活の中で生じる不安や抑うつ、ストレスなどに関わる問題について、臨床心理学、特に認知行動療法の立場から検討する。

東海林は、病いや障害をめぐる語り、健康状態の維持と改善／悪化に関する行動、周囲の肯定的／否定的サポートについて、臨床・健康・医療心理学の観点から検討する。

総合研究は、教員チームによる指導というだけでなく、学生自身の大学での学修を総合するという意味も持つ。これまでの学修をもとに、文献検索と先行研究の検討を経て研究課題を設定し、実験や調査による実証的な分析を行って論文にまとめる作業は、厳しいものではあっても、人間への考察を深め、今後に必要な力を育むための機会となるだろう。

推奨論文：

1「ABCDEモデルの効果の検討―小学生を対象とした認知的介入―」
（湊　麻由佳、平成25年度・学部長賞受賞）
2「シャーデンフロイデの喚起による心理的影響の検討」（原央晃、平成28年度・学科長賞受賞）
3「社交不安者に対する注意訓練とマインドフルネス瞑想および慈悲の瞑想の効果比較研究」
（小野遥加、平成29年度・学科長賞受賞）

３．発達と社会的行動

福野 光輝☆　萩原 俊彦

人間の心と行動は、その成長とともに、またそれをとりまく社会環境に大きく影響を受けながら形成されていく。その意味で、人間を知ろうとすれば、発達的および対人的な視点は欠かせない。「発達と社会的行動」グループでは、人間の心と行動をこうした観点から理解することを目指す。

萩原は、自己形成にまつわる諸問題（例．友人関係や恋愛、養育者との関係、学習と動機づけ、進路選択など）について、おもに発達心理学の視点から検討する。履修生の多くは青年期に属し、成長にも危機にも結びつき得る自己形成の問題に直面している。ここでは、上記問題と派生する諸現象に関わる自己や他者の心理過程と相互作用を検証していく。

福野は、対人葛藤や謝罪、交渉、公正感をはじめとして、対人場面における認知や感情、行動について、社会心理学の理論と方法を用いて検討する。社会心理学で扱われる問題は非常に多岐に渡るが、ここでは、広い意味で、利害の対立や意見の不一致に関わる現象をとりあげ、その際の人々の行動とその心理過程の解明を試みる。

総合研究は、学生自身の大学での学修を総合する意味を持つ。これまでの学修をもとに、先行研究の探索・検討を経て研究課題を設定し、実験や調査による実証的な分析を行って論文にまとめる作業は、厳しくはあるが、人間への考察を深める。また、自ら手を動かし他者と関わりつつ研究を遂行する主体となる経験は、社会に出てから必要な力を育む機会ともなるだろう。

推奨論文

１．職業選択不安と情報収集行動の関連―認知的方略による違い―
（郷家慎一、2015年度学科長賞受賞）

２．青年期の愛着スタイルと他者への依存が友人関係満足度に及ぼす影響
（遠山　翔、2017年度優秀論文賞受賞）

３．『類は友を呼ぶ』は本当か：同族嫌悪を例とした類似性魅力仮説再考
（鈴木幸乃、2017年度優秀論文賞受賞）

４．謝罪受容に対する公正世界信念の影響（佐藤　遥、2018年度）

４．日本社会の変化とライフスタイル

神林 博史☆　小林 裕　仙田 幸子

日本社会は科学技術の発達、人口減少とその年齢構成の変化、および経済のグローバル化の進展に伴って、社会組織から個人の日常生活に至るまで急激に変動してきている。こうした変化は、人々の行動や意識として表れるライフスタイルに大きな変化を及ぼしてきた。「日本社会の変化とライフスタイル」チームは、このような社会変動とライフスタイルの関わりを多角的に検討す

ることを目指す。

神林は、現代日本社会におけるさまざまな不平等に注目する。具体的には、収入、ライフスタイル、職業、学歴、ジェンダー等の不平等の実態とその形成メカニズムが中心的な問題関心となる。

小林は、現代社会における「組織と人間」の問題に心理学的視点からアプローチする。企業・学校などの組織がそのメンバーに及ぼす影響、逆にメンバーの相互作用が組織の成果をもたらす過程に注目する。

仙田は、現代社会における家族とジェンダーの様相に注目する。具体的には、非婚・晩婚化の様相、少子化の様相、性別役割分業の様相、性の多様性の様相などを量的・質的データから描き出す。

参考にすべき総合研究

「ひとり親世帯の貧困：母子世帯と父子世帯の違いに注目した分析」（伊勢彩佳、2014）

「大学教員の感情労働が精神的健康に与える影響
—パーソナリティ特性の調整効果に着目して—」（中村茉里、2014）

「マスメディアが提示するジェンダーマイノリティのイメージの変遷
—女性週刊誌の記事タイトルを例として—」（菅彩花、2014年）

5．学びの文化

黒須 憲☆　水谷 修

私たちの社会では学びの文化を発展させてきた。今日まで継承されてきた伝統芸能・芸術や武道などのけいこごとはその一つである。一方、生涯学習の理念の普及とともに、学びの文化に変化が生じている。様々な活動が学びの対象とされ、生きがいや他者とのコミュニケーションが学びの目的となった。また、まちづくりや地域づくりのための学びや、キャリア開発のための学び直しの文化も育ちつつある。学びの形態も、先生から生徒への一方向的なものから、学び合いが重視されるようになり、近代以降教えの文化を育んできた学校も、学びを重視した文化を創造しつつある。

このように、学びの文化には不易と流行がある。このグループでは、学習活動や芸術、芸能、趣味、体育・スポーツ、ボランティア活動など、様々な活動の中で育まれてきた学びの文化に焦点をあて、それがどのような変化を遂げてきたのか、変化の社会的な背景は何か、現代社会において学びの文化がどのような役割を果たしているのか、あるいは、学びの文化を育てるにはどのような仕組みや取組が必要かなどについて検討する。

水谷は、生涯学習の立場から、生涯各期の学びと遊びに関心があり、「支援」という視点からこれらに関する諸問題について検討している。また、自治体の計画・施策づくりや青少年対象の実践活動に参加・参画している。総合研究では、自分の興味・関心に沿って自由にテーマを設定してよいが、第一にテーマに取り組む熱意、第二にフットワークのよさ、第三に協働する力を備えていることが、参加の条件となる。

黒須は、体育方法学の立場から、スポーツを身体的技術学や生理学としではなく、社会を構成している運動文化としてとらえ、スポーツがうまくなるという事は一つの文化を経験し新しい文

化を創造する事である。という事を理解し、それらが持つ社会的意義や特徴、諸問題について考察を行う。

スポーツの語源は気張らしや遊ぶ事で人生を豊かにする物である。今日の近代スポーツは、過剰な競争原理の反復の末に「勝利至上主義」「巨大イベント化」「メディア主導化」等々の様々な問題を抱え、本来の意義を失い臨界点に達しているといわれている。

推奨論文

水谷

「大学生の心理的居場所感と友人グループとの関連」（近光流、2018年度）

「大学生のアルバイト経験が進路選択自己効力に与える影響」（高橋和、2018年度）

「防災・減災の日常化を図るための地域防災学習の考察」（長谷川光、2017年度）

黒須

「蔵王町立遠刈田小学校の運動会の現状と問題に対する一考察」（佐藤優磨、2018年度）

「北辰一刀流及び千葉周作が現代剣道に与えた影響」（千葉楓、2017年度）

「オリンピック・レガシーに関する一考察」（藤井飛佳、2016年度）

6．さまざまな人間の成長と支援

坪田 益美☆　泉山 靖人　大迫 章史　清水 貴裕　平野 幹雄

「子どもが大人になる」「人が何かを学ぶ」というプロセスは社会の中でどのような意味を持ち、またそのプロセスの中では人にどのような変化が起きているのであろうか。

私たちは、家庭においては親や兄弟姉妹と、学校においては教師や友人と、社会においては職場や地域関係など多様な人間関係を営み、その影響を受けながら心身を発達させていく。私たちを取り巻く現代社会は、急速に国際化･情報化･高齢化を進めている。その影響は、子供の具体的な成長の場である家庭や学校、地域社会にも及び、例えば携帯端末などの新しいメディアとの付き合い方、経済格差と学力格差、コミュニケーション不全、多様な人びとが含まれるコミュニティの形成、小学校における外国語活動の導入、国際レベルでの学力観の標準化、アクティブラーニングなどの学びの手法の転換等、多様な課題に向き合える力量の形成など、新たな諸課題が生ずるようになった。

総合研究では、人間の成長とその支援にかかわる諸課題、そして私たちの成長を支える場である家庭、学校、社会にかかわる諸課題といった幅広い領域から、学生各自がこれまで学習してきたことを基に具体的な研究課題を設定する。関心領域の文献検索、先行研究の検討、文献資料の読解を通して、あるいはフィールドワークや調査・実験などによって、研究を深め論文にまとめていく。３回を予定している総合研究発表会等の交流の機会も生かしてほしい。実りある研究成果が数多く出てくることを期待したい。

推奨論文

「日本におけるインクルーシブ教育の現状と課題」（鈴木智菜美、2018）

「外向型志向の教育が内向型人間にストレスを与える可能性」（佐々木輝也、2017）
「児童期のメディア利用と青年期の知的好奇心の関係」（深田知寛、2017）
「テレビゲーム遊びとワーキングメモリの関係」（藤本武、2017）
「スクールカーストの存在と過ごしやすい環境づくりにおける教師の役割
—生徒に対する教師の働きかけに注目して—」（太田遥香、2017）
「偏見的視点を形成する教育—同性愛者に対する偏見を取り上げて」（武田悠飛、2016）
「子どもの貧困—負の連鎖を断ち切るために」（丹野早紀、2016）
「シティズンシップ育成におけるイエナプラン教育の意義
—アクティブラーニングの視点から」（坂本麻悠子、2015）
「韓国におけるシティズンシップ教育」（中濱暢美、2014）
「子供の規範意識と異世代間交流の関係性—大都市とへき地の視点から」（髙橋有道、2014）
「女性の社会進出と性別役割分業の相関—日本人の潜在意識を手がかりに」（髙橋愛美、2013）

7．人間とスポーツ

岡﨑 勘造☆　坂本 譲

「人間とスポーツ」というテーマにおけるスポーツとは、単に競技スポーツを意味するのではなく、日常的な運動を含むヒトの活動（身体活動）全般を意味します。我々のチームでは、その身体活動全般を研究対象とし、例えば、身体活動に含まれるスポーツ活動について何らかの手法（測定や調査）を用いてデータ化し、データの特徴やデータ同士の関連性を明らかにすることを目指します。結果（データ）の背後に潜む要因（結果が得られた原因）について他のデータとの関連性から考察することもあれば、文献資料等から考察することもあります。具体的な研究テーマとアプローチの仕方については次の通りです。１）ボールゲーム分析、スポーツ動作解析的研究、２）身体活動にまつわる調査研究、３）体力・運動能力測定、４）運動を含む健康行動に関する生活習慣調査、５）パフォーマンステスト及び評価法開発（フィールドテスト、質問紙テスト）、６）運動や生活習慣、ストレスが免疫機能やその他の生体機能に及ぼす影響に関する検討（実験、調査研究）。

したがって、これらのテーマに取り組むためには、ヒトの行動をデータ化する能力、データや文献資料を収集する能力、データを解析する能力、データを解釈する能力を身につけることが必要となります。

推奨論文

「被災状況の異なる児童の強度別身体活動及びQOLの比較と体力との関連」（熊谷泰輝、2015）
「競泳におけるクーリングダウンが血中乳酸濃度に及ぼす影響」（松永裕樹、2016）
「音楽によるリラクゼーションが少林寺拳法組演武時のストレス免疫指標の変動に及ぼす影響」
（百井香穂、2017）
「生活習慣改善支援事業が児童生徒の心身に及ぼす影響：国立花山青少年自然の家による縦断研究」
（佐藤沙恵、2017）

8．文化のしくみと解析

信太 光郎☆　小林 睦　津上 誠　文 景楠

「文化」とは何だろうか。きわめて多様な意味で用いられる言葉である。一般的には、人間の生活様式の全体、あるいは、人間が作り上げてきた有形・無形の成果の総体が「文化」と呼ばれる。

よく似た意味の「文明」という言葉と比べてみよう。文明が「四大文明」「機械文明」「物質文明」など、人間の知識や技術が向上することにより便利になった人間生活のあり方を指すのに対し、文化は「縄文文化」「日本文化」「東西文化」など、地域や時代に根ざした形で人間精神が生み出したものの全体を意味する、と言える。

私たちが取り上げようとするのは、後者の「文化」である。ある歴史家によれば、文化には、娯楽・ファッション・ライフスタイル等、衣食住を中心とする「ソフトな文化」と、言語・宗教・道徳などの「ハードな文化」の、二つの側面が存在する。ソフトな文化は産業化や情報化によって大きく変わっていくのに対し、ハードな文化は時代が移っても比較的ゆるやかにしか変わらない。

ソフトな文化であれハードな文化であれ、それがどのようにして生まれるのか。また、文化が人々に受容され広まる、あるいは逆に、それが放棄され廃れるのは、どのようにしてか。こうした文化のしくみについて考察し、それを論文という形にまとめ上げること、これが本チームの課題である。

推薦論文

「人工知能によって変化する人間社会の仕事」（畠山成美、2016）
「ホームドラマの変貌と家族観の変化」（鈴木菜乃子、2018）
「ジャニオタの変化と持続―ジェンダー史的観点から―」（笠間彩花、2019）
「「人間らしさ」とは何か―文学作品で描かれる生き物の描写を手がかりに」（横山結衣、2019）

9．中韓の言語文化

金 亨貞☆　塚本 信也　楊 世英　金 永昊　松谷 基和

中国は、西方の異文化の影響や北辺の遊牧民族の圧迫を絶えず受けながら、有史以来独自の文明圏を形成し、持続的な展開を遂げてきた。朝鮮半島及び日本は、その強い影響下にありながらも固有の文化を育んできた。こうした中国を核とする東アジア文明圏は、漢字、仏教などを共通の基盤として、伝統文化を形成してきた。しかしその伝統ないし体制は、西欧近代の成立によって変更を余儀なくされ、困難な近代化の過程を強いられることになる。

本チームでは、伝統のみならず、近代以降、さらに劇的な変化をとげる現在の東アジア情勢をも等しく視野に入れながら、言語や文化、思想、芸術から風俗や生活習慣にいたる多様な文化の諸相、また経済発展や環境問題、国際協力など今日的なグローバルな諸課題を考察の対象として

取り上げる。具体例を挙げれば、中国語や韓国・朝鮮語文化圏における服飾や文化の変遷や言語上のジェンダー差別表現などに着目し、その歴史的背景を考察したり、あるいは少子高齢化社会のもたらす社会・経済的インパクトを地域間の比較も視野に入れつつ分析したりすることが可能であろう。

このようにアプローチの対象は、それが研究課題として成り立つ限り、それぞれの問題関心の所在に応じて自由に選択されてよい。また文献資料に限らず図像資料の解読、統計資料の活用なども有効な方途となろう。東アジアを対象とする個別具体的な課題の探求を通して、文化や異文化交流の深層に触れ、各国各民族の相互の相対化と共生の可能性を探求することこそが、本チームの最終的な目標である。

推奨論文

・「農民工から見た改革・開放以来の中国農村社会の変動」（藤野美恵、2012年）
・「中国における宮沢賢治童話の受容―「雪渡り」を中心に―」（太田恵、2015年）
・「日本植民地下台湾における原住民教育について―蕃童教育所を中心に―」（永山真寿美、2016年）
・「韓国語の形容詞派生接尾辞についての考察―「-스럽다」「-롭다」「-답다」を中心に―」（井手友紀子、2016年、韓国語で執筆）
・「教科書にみる竹島に関する記述研究」（渡辺肖、2018年）
・「朴正熙５・16軍事クーデターと２・26事件の関連性」（野呂志緒里、2018年）
・「ニューカマー韓国人と在日韓国人社会の変容―Ｓ市・Ｄ教会の事例から―」（渡邉ゆり子、2019年）

10. 日本の言語文化

佐藤 真紀☆　原 貴子　房 賢嬉

日本語や日本文化は、日本で生まれ育った人にとって、日常的で当たり前のものかもしれません。本グループでは、その当たり前だと思っていた日本のことばや文化の仕組み・実態に着目し、自分なりの問いを立て、深く掘り下げていくことを目指します。具体的には「日本語学」「日本語教育学」「日本文学」の領域の研究を行います。

ことばに目を向けるのが、「日本語学」や「日本語教育学」です。日本語学は、日本語そのものを分析対象とし、日本語の法則を追求します。例えば、語や文の構造・談話の構成・音声の特徴・言葉の意味・実際の言語使用・日本語の変化など、日本語のメカニズムを明らかにしていく研究が可能です。後者の日本語教育学では、日本語が母語ではない人に日本語を教える際に起こる様々な現象を取り上げます。例えば、言語学習の過程・日本語学習者の言語使用・学習者や教師の意識等の実態を明らかにする研究、効果的な教授法や多言語多文化共生のあり方を追求する研究などが可能です。

また、文化に目を向けると、日本文化が集約されているものの一つとして「日本文学」があり

ます。日本文学の研究では、語りのあり方・読者という存在・本文の生成過程などを明らかにしていきます。さらには、映画・漫画・アニメといった媒体との影響関係なども追求することができます。日本の文学作品に触れ、深く理解し、考察していくことで日本を知ることに繋がります。

当たり前だったものに対して疑問を持ち、自らの足もとである日本のことば・文化を考察することが、異文化理解への出発点になるでしょう。

推奨論文

「日本社会に住む韓国人のライフストーリー：ケーススタディーから探る多文化共生社会」（大場悠香、2016）

「ベトナム語母語話者による日本語発音協働学習の試み」（齋藤ゆみ乃、2018）

「日本昔話の異類婚姻譚にみる日本人の動物への意識：「猿聟入」を中心に」（半澤優桂理、2019）

11. 英語圏の言語文化

ワトソン スコット☆　秋葉 勉

文化は人間が生きる中で生み出した形である。それは特に言語によって媒介されるが、日常的には人間の習慣（衣食住）、そして昇華された形で芸術の中に示される。その文化の様々な形態を読解・理解することは、人間を理解することである。本グループは英米圏の文化をテーマとしている。英語圏は歴史文化的にほぼ同一のルーツを持っているので、文化の伝播を考察することも可能であるが、それぞれの個別の文化事象を研究することもできる。具体的には、文学（詩、童話、小説。あるいは西洋全体の運動であったロマン主義など）、民族学、写真や映画、絵画、庭園、建築、都市などの視覚的芸術・オブジェ、アメリカの20世紀の文学・芸術運動などが挙げられる。私たちは日本人であるので、日本文化から見た比較文化的な視点が前提となるが、そもそも文化は単独では存在しない。そこに、どの文化の中にも、グローバル世界における多元的価値が姿を現すだろう。

推奨論文

「日本語オノマトペの理想的ドイツ語訳―マンガ翻訳を通して―」（熊谷美帆、2013）

「グリム童話における二つの女性像」（高橋千佳、2014）

「グリム童話の『森』の２つの世界―異世界と日常の世界―」（徳田菜美、2015）

12. ヨーロッパの言語文化

門間 俊明☆　佐伯 啓　フリック ウルリッヒ　山崎 冬太　2020年度新任教員

ヨーロッパの文化は、言語、思想、文学から、芸術、映画、ファッション、さらにはスポーツや車にいたるまで、いろいろな形で私たちの生活の中に入り込んでいる。なかでもドイツとフランスの文化は、高等教育機関における言語教育の伝統とも深く結びついて、わが国の学問や文化に大きな影響を与え続けてきた。

「ヨーロッパの言語と文化」をテーマとするこのグループでは、新しいヨーロッパを目指すEU（欧州連合）の中で、政治経済的にも文化的にも特に重要な役割を担っている、ドイツおよびフランスの言語と文化をおもな研究対象とする。「言語」と「文化」という二つの核を視点に据えることで、ドイツ語圏、フランス語圏のあらゆる文化事象が考察の対象となる。また、ひろくヨーロッパの芸術文化もそれに含まれる。

具体的なアプローチとしては、独仏それぞれの文化論的・文化史的考察、文学、美術の分野での作家や作品研究、日独仏の比較文化、言語表現分析などさまざまな問題設定が考えられよう。さらには、歴史的、地理的な関わりも視野に入れれば、ヨーロッパという大きな枠組みの中でこれらの問題を捉えなおすことも可能だろう。

推奨論文

「『グリム童話集』の中で森はどのような役割を担っているのか」（佐藤　光、2011）
The Reason for the Popularity of Manga in France（小竹真菜実、2011）
Problems of Language and Culture in the Translation of Japanese Manga（山寺しおり、2011）
「ピエール＝オーギュスト・ルノアールの裸婦像」（福士茉莉、2012）優秀論文
「世界２大スポーツブランドの戦い」（城戸亮兵、2016）
「Kipferlの文化史―ドイツの伝統的焼き菓子のフォルムとその意味の変遷―」
（宍戸なな、2017）

13. 表現と文化

下館 和巳☆　井上 正子　宮本 直規

「文化」の英語“culture”の“cult”には語源的に「生成」という意味があります。ですから、“agri”つまり「土」と結びついた“culture”は“agriculture”つまり「農業」になるわけです。「文化」という言葉は、歴史的に「創造する行為」と深い関りを持っています。このグループの特色は、創造された結果として「自然を写す鏡」となっている芸術様式の中でも、とりわけ、映画・演劇・文学といったジャンルに焦点をあてていますから、創造的要素の濃さにあります。具体的には、映画・舞台芸術を成り立たせる重要な要素としての俳優、観客、脚本の理論的考察、

或いは舞台製作といった実践的創造を行いながら、ヴィジョンと言語を軸とした芸術と文化の相関関係を極めていきます。

推奨論文

「『ロミオとジュリエット』舞台製作」（グループ製作、2017）

14. 言語の分析と応用

岸 浩介☆　高橋 直彦　坂内 昌徳

本グループが扱う主要な領域は、言語の分析と応用、つまり言葉に対してどのような分析が可能か、コミュニケーションの道具としてどのように働いているのか、などを調べることです。

言語は、音声と意味の２つの側面を持ち、また、その構造も語・文・談話といったレベルの違いが存在します。どのような側面から研究するかによって音声学・形態論・統語論・意味論などの分野に分かれます。また、発話の状況を含めて意味を考えるとき、語用論と呼ばれる分野があります。最も広い意味で文法を考えるときは、「文法」は上で述べた言語の構造をすべて含みます。

それぞれの分野で提案されている理論はひとつとは限りませんが、どのような理論であれ、総合研究では、それに何か新しい見方や観察、証拠などを付け加えることが目標です。言語の構造は複雑ですから、いろいろな見方や分析が可能です。

また、本グループでは、第二言語習得や教材作成など、学び方や教え方の研究も対象として含みます。たとえば、特定の言語の音声・語・文の構造の分析をもとにした、効果的な学習法や教育法についての研究等です。どのような側面から言語の構造について研究する場合も、先人の積み上げたものに小さい１個を加えるという謙虚な気持ちで研究に臨んでほしいと思います。

推奨論文

「終助詞『よ』と『ね』の統一的な意味・機能」（阿部真衣、2010）

「ひな形方式に基づく英語の文構造再考」（佐藤怜美・小林維奈、2012）

「同格名詞節を導く接続詞 that の省略に関する再考：英語母語話者の直観的判断を通して」（大和田拓弥、2015）

「継続アスペクトの日英韓比較―日本語母語話者の英語・韓国語習得の観点から―」（千葉絵里子、2017）

15. 情報科学の基礎数学

佐藤 篤☆　小林 善司　石田 弘隆

情報科学に関する技術の進歩とその応用の可能性は、コンピュータの能力と共に日々進化している。その基礎として、また今後のさらなる発展を支えていくものとして、数学および数学的な思考方法がある。古典的な代数学、幾何学、解析学、集合論、数理論理学といったものにとどまらず、グラフ理論や暗号理論・符号理論から数値解析に至るまで、数学と情報科学との結びつきは深いものがあり、それらを理解することは情報科学を理論の面から進化させていく上で欠かすことができない。

このテーマでは、情報科学の基礎としての数学を基本的な立場から学ぶ。取り上げるのは「数え上げ組合せ論」「代数幾何学」「離散的な幾何学」といったトピックや、それらの応用である。また、コンピュータを利用して数学的な抽象概念をコンピュータグラフィックスの形で可視化することも目指す。さらに、数学教育の現状についての検討も積極的に行い、どのような教育が求められているかについて考えたい。

教員免許状（中学校・高等学校数学）の取得と共に実際に教職に就くことを目指す上で、数学的な知識を身につけることと、人に伝える能力を身につけることは必須条件である。卒業課題の研究においては、それらのことも十分に考慮される。

推奨論文

「３次方程式の解法について」（小林由紀子、2004）
「パスカルの定理とその応用」（吉田雄樹、2016）
「多角形と多面体のEhrhart理論」（小菅寛華、2017）
「ブロック・デザインの構成について」（茂木智花、2017）

16. 情報科学と現象の数理

星野 真樹☆　岩田 友紀子

自然科学においては、どの分野に限らず「どうなっているのだろう」「なぜだろう」という疑問を持つことが始めの一歩です。この疑問を問題として表現し、さらに解決に至る有力な方法を提供するのが数理科学です。「情報科学と現象の数理」では、そのような数理科学の方法のおもしろさと有効性を学習します。学生が、解決の糸口となる基礎的な理論や技法を学び、自ら解決の道を切り開いていくことができるよう、教員は助言や指導を行います。

数理科学の方法の有効性を最も明瞭に示すのが数学です。われわれは、パズルや数学の基礎的な問題を通して、その力の根源に迫ります。また、自然界の現象が数理科学の言葉で表現され、理解できることも学びます。

課題の具体例として、次のようなものがあります。

(1) 数学の基礎理論と応用
数学における様々な分野から興味ある話題を選び、基礎的な理論を習得し、その応用を試みる。教科書の輪読と討論を行い、理解を深める。

(2) 数学の諸問題のコンピューターを用いた取り扱い
定理として得られた諸結果やその具体例等について、コンピューターによる可視化を試みる。また題材に応じて実際の現象を数学的に解釈し、Mathematicaなどの数式処理ソフトなどを用いて、そのシミュレーションについて考察する。

推奨論文

「コーホート解析を用いた人口動態の数理モデル」(大澤慶子、2012)
「染谷・シャノンのサンプリング定理」(佐藤健太、2015)
「正則関数の零点と代数学の基本定理」(大友陽介、2016)
「ケルマック－マッケンドリックの伝染病モデルに対する数学的考察」(櫻井大輔、2016)
「曲面の構造方程式とその可積分条件」(柴澤大夢、2017)
「フーリエ級数と等周問題」(小山清也、2018)

17. 情報科学と生命のメカニズム

松尾 行雄☆　土原 和子　牧野 悌也

情報を「特定の機能を発現するシステムの状態・行動を決定するために必要なモノ」と定義する。そうすると、生命はその誕生と同時に「情報」を生みだし、その進化の過程で様々な形態の情報処理能力を発展させてきた、と捉えることができる。生命を理解することは、地球上で最も長い歴史と優れた柔軟性を持つ「情報処理システム」を理解することに他ならない。本グループでは生命の情報処理のしくみについて、感覚受容（土原)、脳神経系（牧野)、計算アルゴリズム（松尾）を中心テーマとして研究をおこなう。

土原：

我々ヒトも含め生物は、日々環境から情報を受容しており、そのための感覚器を持っています。目で見て、匂いをかいで、触ってみて、味わう。これらはすべて感覚器で行っています。受容される物質の方は、情報伝達物質といいます。研究室では主に昆虫を使って、機械受容（気流、音等)、化学感覚（味覚、嗅覚等）受容の研究を、行動と分子サイド（遺伝子やタンパク質）からおこなっています。ここでは、実際に生き物を使って、どのように情報伝達物質を認識しているのかを解明していくことを目的とします。

推奨論文

「チョウの幼虫における音響刺激に対する行動」(伊藤伊知郎、2017)
「ジャコウアゲハの成長に及ぼす要因～栄養～」(芳賀祐輔、2018)

牧野：

生き物の活動には人の好奇心を駆り立てる面白さがあります。一方で、生き物の仕組みはたとえそれが単細胞生物であっても大変複雑で、生き物の面白さを理解するには複雑な現象を簡単な形に整理する力が必要です。ここでは、ヒトや動物の感覚情報処理・運動制御に関わる観察や実験、あるいはモデル化を行うことで、生き物が柔軟に活動する仕組みを明らかにするとともに、複雑な現象を理解する力の獲得を目指します。

推奨論文

「スニッフィングの匂い情報表現へ及ぼす影響」（佐藤将太、2016）

「触覚における形識別」（新田大介、2018）

「単純図形の組み合わせが生み出す印象」（佐々木航、2019）

松尾：

人は音を聞くことによって音声を認識し、音源がどこにあるかを知覚しています。また、イルカやコウモリは音を自ら出し、対象物から反射してきたエコーを聞くことによって、3次元空間を知覚しています。しかし、音がどのように処理され知覚されているかは、未だ解明されていません。ここでは心理物理実験や計算機を用いた解析により、これらのメカニズムを理解し、応用していくことを目的とします。

推奨論文

「広指向特性超音波を用いた人検知」（星友也、2016）

「発声方法と歌真似が歌唱評価に与える影響」（村澤一実、2017）

「周波数帯域の時間反転が音声明瞭度に与える影響」（菅野絵莉、2018）

18. コンピュータシステムの構築

菅原 研☆　武田 敦志

センサーやロボットなどの機器とコンピュータが連携して動作する新しい形のコンピュータシステムの構築を行います。このコンピュータシステムの構築を通じて、情報科学の基礎理論や情報システム開発技術の研究だけではなく、機械と人間が連携して作業する仕組みについても研究していきます。また、ソフトウェア開発や実験に関する技術を習得すると同時に、実験結果などの数値の解析方法や研究成果の発表方法（論文執筆やプレゼンテーションの方法）についても重点的に学習していきます。

具体的な研究テーマの例は以下の通りです。

(1) 複数のコンピュータを連携動作させる情報システムの構築

(2) センサやカメラから得られた情報（画像など）を解析する技術の開発

(3) 場所や状況に自動的に対応して動作する小型ロボット制御技術の開発

(4) 生物の群れ行動の仕組みとその影響の研究

推奨論文

「ニューラルネットワークを用いた音楽データの楽器分類手法」（佐藤佑樹、2018）
「Bluetoothのad-hocネットワークを用いた出席管理システムの構築」（庄司悠人、2019）
「トゲオオハリアリの刺激応答に関する研究」（本間亜咲佳、2018）
「二度寝防止のための 目覚ましロボットの試作」（齋藤雄太、2019）

19. 情報技術を活用した社会の課題解決

坂本 泰伸☆　村上 弘志　高橋 秀幸

この総合研究では、生活や教育、地域コミュニティなどの多様なフィールドに潜在する課題を、「情報技術の活用」を通じて実践的手法によって解決していくことをテーマの主題とします。高齢化社会への対応、防災や減災の推進、天文学を中心とした小中学校での教育など、幅広い対象がテーマに含まれます。

社会の課題解決には、単に情報システムを開発するだけではなく、課題の発見や把握、調査や分析、解決策の提案といったように、一連の取り組みを進めることが求められ、この一連の課題解決の流れに情報技術の活用を積極的に図ることで、問題解決の促進が期待できます。

研究では、情報技術に関する学習を進めながら、受講生の意思を尊重しテーマやフィールド、チームなどを決定して進めていきます。また受講者には、領域横断的な活動を推奨しますが、一つの領域に特化した研究を進めることも可能です。実効性があり、成果を意識した取り組みを期待します。

推奨論文

「星座の立体表示システムの開発」（高橋彩花、2019）
「惑星状星雲を題材とした高校生向け教材の改良」（横澤瑠唯、2018）
「限界等級評価システムの改良」（齊藤妃那、2017）
「VRによる自然風景画像のストレス反応測定に用いるアプリケーションの開発と評価」（八木和也、2019）
「MVCモデルに基づく集会所予約管理システムの改良と評価」（萠出　瞳、2018）
「高齢者の孤立防止活動に対する写真印刷システムの導入と評価」（若林実歩、2017）

20. 人の暮らしと自然環境

平吹 喜彦☆　柳澤 英明

地域には「自然の恵み」に応じた暮らしがあり、たくさんの「かけがえのないもの・こと」が育くまれてきた。一方、洪水や土石流、台風、津波などの「自然災害」は、しばしば人命や財産を奪い、住宅地や商工業地、農地、森林といった生活や文化の基盤にダメージを与えてきた。このチームでは「自然の恵みと災い」という二面性に着目し、「人と自然のよりよい関係づくり」を考究・実践する。

学修目標の達成に向けて受講生ひとり一人は、①特定の地域を対象とし、②既存の文献を批判的に読み解きながら、③自らの手でフィールドからデータを収集し、④適切な手法を重ねて考察を深めてゆくことになる。調査・研究の進捗状況を報告し合うことはもちろん、他者の取り組みにも積極的に参加することで、実体験に基づく知識と技能を身につけることができるだろう。平吹は景観生態学・環境教育（ESD）の視点から、柳澤は地域の防災・復興・活性化の視点から研究指導を行う。

推奨論文

「仙台市新浜地区における「交流を促進する仕組み」づくり」（澤口文香、2018）
「津波を受けた海岸後背湿地における自律的な植生再生と微細地形」（菅原諄史、2018）
「GISを用いた砂浜海岸エコトーンと里浜の地理・景観情報の統合化と可視化」
（佐藤祐二朗、2019）
「災害経験を活かした地域づくりの実践的研究
～気仙沼市本吉町における被災経験の風化と災害伝承～」（佐藤茉央、2018）
「地域住民参加型のワークショップを通じた水辺空間の活用方法について
～名取市閖上を対象として～」（千葉　礼、2018）
「災害の教訓とこれからの防災教育について」（佐藤史彬、2019）

21. 地域の経済と文化

柳井 雅也☆　岩動（いするぎ） 志乃夫

今日の地域社会には多くの課題が山積しており、中でも経済的な課題は地域形成に大きな影響を及ぼす。課題となっている要因の特定および解決の提案につなげていくためには、問題を広い視野で構造的に捉え、地道で正確な調査・分析を空間的視点から行っていく必要がある。当分野では、地域に存在する幅広い課題を捉え、学生が自らの視点を活かし、課題の解決に向けて意欲的に挑戦する研究を指導していきたいと考えている。

取り上げるテーマは、経済・産業など大きなものから、個別企業、商品、祭りやイベントなど地域文化に至るまで多様であり、それをどのように考え、構築し、展開していくかについても多

様な視点が要求される。学生自身の今までの学習の集大成として、自由でかつ大胆な視点から、また地域課題の縮図として、それを広く応用できるように緻密な調査・分析によって、まとめていって欲しいと考えている。

この分野を希望する学生数が多いことに加え、取り上げるテーマが多様であることから、十分な指導を行うためには、早い段階からテーマを決め、資料収集、調査などを計画的に進めて行く必要がある。指導教員から十分な指導を受けるためにも、意欲的に教員に働きかけ、取り組んでいく姿勢を示して欲しい。構想発表会などの予定は、積極的にかつ早めに進め、成果が十分得られるように進める。なお各テーマについて意見が必要な場合は、直接担当教員に問い合わせていただきたい。

推奨論文

1.「宮城県仙台市における子ども食道の現状と今後の展望」（松崎美保、2018年３月卒業）

2.「青森県八戸市における銭湯利用の変化と観光資源化への取り組み」
（畠山友花、2016年３月卒業）

3.「東北地方におけるクラフトビールの人的ネットワークについて」
（白戸沙英、2018年３月卒業）

4.「地方都市の郊外団地における高齢者の買い物行動特徴とその課題
～福島市蓬莱町を事例に～」（本田香織、2019年３月卒業）

22. 地域のまとまりとゆらぎ

遠藤 尚☆　高野 岳彦　佐久間 政広

人間が生きるということは身の回りの空間に自分なりの意味を与えることであるということに諸君は気づくだろうか。空間に与えられる意味は、一定の環境のもとで暮らす地縁集団にとっては集団的意味に転化し、それらは一定の「まとまり」をもった景観を生み出す。「地域」はこうして生まれる。それぞれの地域で、人々は自然や社会とのかかわりの中で様々な生活の知恵や人間関係、価値観を継承したり再構築したりしている。個性豊かな地域の景観はその結果でもある。

他方、現代の地域は、人口減少、高齢化、産業空洞化、公共サービスの維持困難、自然災害、そしてグローバル化の影響など、多くの不安定要素に満ちており、地域は日々変動する「ゆらぎ」の中にある。それは日本だけの現象でなく、他の国々でも変わらない。

私たちのチームでは、こうした「地域」をめぐる「まとまり」と「ゆらぎ」の諸相を、担当者の専門分野である産業地域論、地域文化論、人文地理学を基礎としつつ、関連分野との交流も図りながら、文献調査、現地踏査、統計分析、質問紙調査、分布図づくりなど地域研究の諸手法を駆使して、とらえたいと考えている。

推奨研究

「機織技能の伝承保存活動をめぐる伝統文化観の変質―小野田地織」（佐々木汐音、2010）

「万石浦の漁場利用システムと種ガキ生産」（小野寺朋美、2016）
「桑折町における住民主体のまちづくりの取り組みと課題」（久保貴義、2017）
「阿武隈山村山舟生の多様な食資源とその担い手」（山田佳奈、2017）
「郊外住宅団地の高齢化・商業空洞化と買い物弱者解消の取り組み」（村山花奈、2018）
「ふるさと納税制度は地域格差の是正に役立っているか」（市川歩、2017）
「隣接地域の被災地支援における公助と共助の区別と連関
—岩手県遠野市と宮城県登米市鱒渕地区の事例」（小野寺翔、2016）

23. 少子・高齢社会と福祉

菅原 真枝☆　大澤 史伸　増子 正

少子・高齢化の進展に伴い、わが国の社会福祉は転換期に直面している。「福祉」という言葉から、生活困窮者や障がい者、介護が必要な高齢者に対する支援を思い浮かべるかもしれないが、現代社会における福祉課題はこれにとどまるものではない。地域社会に目を転じてみれば、人間関係の希薄化や地域活動への参加の機会の減少により、子育てに不安を感じたり、高齢者の単独世帯の増加に伴う災害時の要援護者支援も急務である。障がいの有無に関わらず、世代を超えてすべての人がよりよい地域生活を営むための社会全体の福祉のあり方を考え直さなければならない。

福祉は、社会政策によってのみ支えられているのではなく、家族や地域、企業、NPO などの市民団体、ボランティアなど様々な社会資源によって支えられており、これらインフォーマルな活動が地域の福祉の重要な部分を担っていることを認識しなければならない。福祉をわれわれの地域生活と密接に結びついたものとして捉え、総合的な視点からアプローチすることが求められている。本チームでは、地域社会が抱える福祉課題について文献や資料から考察したり、実際のフィールドでの調査活動や具体的事例の分析を行う。

推奨論文

地域通貨はコミュニティ形成に貢献できるか
—宮城県仙台市泉区永和台の地域通貨『かまど』の事例を通して（白石淳弥、2008）
仙台市の待機児童の増加と原因（菅原葵、2009）
地域防災活動における民生委員の役割（酒井優、2011）
地域医療及び地域の福祉におけるドラッグストアの役割（熊谷直人、2013）
東日本大震災から 4 年後の心のケアの現状把握
—NPO を通して心のケアを可能にする方法—（小松準弥、2016）
みやぎ生協ボランテアセンターの抱える課題と対応の現状（鈴木雄太、2016）
宮城県の介護施設における介護ロボット導入の現状（千崎吏稀、2017）

24. 健康とスポーツの科学

天野 和彦☆　松原 悟　高橋 信二

「スポーツ」とは、固定化されたものではなく、時代、場所、歴史などにより、流動的に変動する文化の事です。特に、最近では、政治性や経済的基盤により公共の施設が民営化されており、地域で活躍するスポーツにはスポーツを通じて健康の維持増進や教育といった社会的な役割を担うことが期待されています。「健康とスポーツの科学」チームでは、受講生一人ひとりが地域で活躍できるような人材を教育することを目標としています。

「健康とスポーツの科学」チームでは、上記の目標を達成するために、スポーツ活動が人々の健康に与える効果を科学的に検証するための分析方法、スポーツ活動を運営するためのマネジメント、スポーツ指導方法を実習により習得していきます。また、習得した方法を用いて活動した結果を卒業研究としてまとめる作業を通じて、受講生の論理性もトレーニングします。

具体的には、①科学的なスポーツコーチング、②中高齢者の健康と運動処方、③スポーツ生理・心理学的研究、④プロスポーツと地域社会、⑤住民参加型のスポーツクラブ・イベントのマネジメントをテーマとして（①と②と④を松原、②と③を高橋、④と⑤を天野がそれぞれ担当）、総合研究を行っています。

推奨論文

「運動部活動におけるリーダーシップに関する研究
—高等学校軟式庭球部の顧問教諭に着目して—」（窪田陽香、2018）

「高齢者のQOLと健康について」（佐藤　風、2018）

25. 自然資源の保全と地域マネジメント

松本 秀明☆　和田 正春　目代 邦康

地域には、地形、気候、植生などで構成される自然的景観資源や伝統、芸術、産業などの文化的・経済的資源が豊富に存在している。本研究チームの目的は、それらの地域資源を積極的に掘り起こすとともに独自の調査・研究により多面的な評価を与え、それらを地域の持続的発展のための資源として有効活用してゆく方策を見いだして行くことにある。ここでの研究成果は地域振興に資するとともに、貴重な地域資源の保全、保護にもつながるであろう。

本テーマの目的を遂行するため、受講生は地域の自然の成り立ちを調査・研究するとともに、それらの価値を正しく評価できる知識や技法を習得すること、伝統、芸術、産業の興りや継承にかかわる知識はもちろん、地域特有の構造を学ぶことが必要となる。松本は地域の自然の成り立ちについて、目代は様々な自然物のもつ潜在／顕在的価値を評価し資源として再構築する方法を、和田は各地域の自然的、文化的、経済的資源を、地域固有の持続的発展のための「仕組み」

として組みあげる方法について指導する。

受講生のひとり一人が、調査・研究の進捗状況を互いに報告し合い、他者の取り組みにも積極的に参加することにより、実践に基づく知識と技能を身に付けることになる。

推奨論文等

「阿武隈川下流にみられる自然堤防地形とそれを構成する堆積物」（三上瑛二、2019）
「松島湾における2011年東北地方太平洋沖地震津波前後の砂浜変遷」（八幡恒輝、2018）
「地域における子ども読書推進活動のこれから―美里町近代文学館を事例に―」（相澤葵、2019）
「一ノ蔵と獺祭の比較　地方中小企業の生き残り戦略」（佐藤由佳・小田島愛、2018）
「過疎集落における祭りの実態と展望　大鰐町ねぷた運行を例に」（阿保里奈、2017）
「指定管理者制度導入の実態　吉野作造記念館を事例に」（我妻朋美、2016）
「象潟の流れ山地形の価値の評価と保全」（想定される卒論題名）
「栗駒山における登山道の保全と管理方法」（想定される卒論題名）
「学校ビオトープを用いた環境学習の実態と課題」（想定される卒論題名）

26. 情報技術と社会

乙藤 岳志☆　伊藤 則之　杉浦 茂樹　鈴木 努

現在の私たちの生活は様々な情報技術の恩恵を受けて成立している。コンピュータ、スマートフォン、インターネット、ソーシャル・ネットワーキング・サービス（SNS）といった情報技術は日常生活の一部であるとともに、学術研究の重要な基盤となっている。

「情報技術と社会」チームでは、これらの情報技術と社会との関わり方を人間科学と情報科学の両面から考えていく。人々の意識や行動は情報技術の進歩によってどのような影響を受けているのか、社会においてどのような情報技術が求められているのか、またそれを実現し人々の活動を支援していくためにどのような情報技術が可能なのか、各教員の専門分野をベースにしつつ、さらに幅広い視野から研究を進めていく。

伊藤は情報科学とくにソフトウェア開発の視点から、人間の社会活動を支援する情報技術の実現とその効果を見てゆく。特に、SNSに関連するスマートフォン用アプリケーションの開発技術、またそのアプリケーションの使いやすさや利用形態について、実際のアプリケーションを開発し、適用することにより評価・分析を行う。

乙藤はネットワーク技術、ネットワーク社会と人間・社会とのかかわりを見ていく。クラウド環境とスマートフォンのネットワーク、ネットワークにおける脆弱性からの保護など、使う人の裏側にある、技術的、社会的課題を解決する研究を行う。

杉浦は情報科学とくにコンピュータシステム構築の観点から、情報技術と人間や社会とのかかわりを見ていく。例えば、KinectやLeap Motionなどのナチュラルユーザインタフェースを活用したシステムの開発と評価、高齢者や障害者を支援するシステムの開発と評価、サーバのログ解析によるネットワークセキュリティの考察などの研究を行う。

鈴木は人間科学とくに社会学の視点から、人々の情報行動の分析を行う。例えば、SNSにおける人間関係のネットワーク分析やテキストマイニング、情報可視化のための Web アプリ作成などを行う。

推薦論文

「視覚と聴覚の同時処理能力を高める訓練支援アプリケーションの開発」（佐藤友朗、2017）
「CumulusClipsを用いた動画投稿サイトの構築、運営」（下道将太・東海林建哉、2018）
「複数のWebサイトからの連絡を一元的に管理するアプリの開発」（齋藤元耶・宍戸優木、2018）
「『怒り』感情を含むネガティブなツイート行動をする大学生の特徴
—仮想ツイートを用いた実験による検証—」（吉田美樹、2018）

27. メディアの文化と産業

小林 信重☆　アンドリューズ デール

現代社会に生きる私たちは、情報を伝達・保管・記録するさまざまなメディアとのかかわりのなかで生活しています。新聞やテレビ、コンピュータやインターネットのようなメディアは、私たちの生活に大きな影響を与えています。他方で、私たちの日々の営み自体が、これらのメディアの意味や用いられ方に影響を及ぼし、また新しい文化や産業を生み出しています。

本チームでは、ゲーム、アニメーション、マンガ、テレビ、映画、スマートフォンアプリなどのメディアについて調査・研究していきます。メディア作品やその作り手、受け手、作品・作り手・受け手を取り巻く社会、あるいはこれらの間の関係が、私たちの研究対象になります。たとえば、ｅスポーツ、ゲーム実況、2.5次元文化、ゲーム産業、聖地巡礼、フェスティバルなどが、具体的な研究対象として想定されています。

これらの対象の実態や原因、その影響などを、皆さんがこれまで大学で学んできたさまざまな概念・理論や、データ収集・分析のための方法（インタビューやフィールドワーク、質問紙調査、ドキュメント分析、実験など）に基づいて明らかにし、卒業論文を書くことが、本チームに参加する人には求められます。メディアの文化と産業に関心を持ち、これらを学術的に分析する意欲を持つ方の参加を期待します。

推薦論文

『コスプレイヤーと役割意識』
『臓器化するスマートフォン』
『イマドキのノロケ事情：SNSにおける若者カップルたちの投稿に着目して』

28. 人文･社会科学データの計量的テキスト分析と活用

松本 章代☆　片瀬 一男

「データ分析」と聞くと真っ先に数値計算を思い浮かべる人も多いと思いますが、本研究グループでは「データ分析」の中でも特に「テキスト分析」を扱います。数値だけでなく文字情報を分析することによって、分析の幅が格段に広がります。大量のテキストデータから、「隠れた」情報や特徴・傾向・相関関係などを探し出し、新たな知見を得ることを目指します。

人間科学科と情報科学科の学科横断グループですので、そのメリットを活かし学際的な研究を目指していきたいと考えています。

片瀬は、教育社会学を専門とし、教育行政や教科書・人間形成にかかわる文書データの内容分析を担当し、その教育文書の背後にあるイデオロギーを明らかにしたり、人間形成に関連する要因を社会学の見地から明らかにします。

松本は、主に「情報システムの利用者が入力した文章」を扱い、その内容を分析した結果を活用することを目指します。

主な研究テーマとしては、次のようなものがあります。

⑴　中教審答申など教育政策に関する行政文書の構造分析（片瀬）
⑵　中学・高校の国語・社会科の教科書の分析（片瀬）
⑶　同窓会誌の記事の内容分析（片瀬）
⑷　人間の成長を描いた小説（Bildungsroman）の内容分析（片瀬）
⑸　外国語会話訓練システムの学習データに基づく学習者の発話レベルの判定（松本）
⑹　テキスト解析による商品レビューの信用度分析（松本）
⑺　適切なルーブリックの文言を書くための支援システム（松本）
⑻　Twitterにおける反モラル的な投稿の分析（松本）

これ以外にも、学生と相談のうえ、興味ある問題について研究したいと考えています。

推奨論文

「魂の教育：看護教育雑誌の『隠れたカリオキュラム』」（秋山朋香、2010年度）
「ポスト近代社会において若者に求められる〈能力〉：
内閣府『人間力戦略研究会報告書』の内容分析」（鈴木光、2016年度）
「外国語会話訓練システムにおける学習者の発話レベル判定の検討」（阿部未萌里、2017年度）
「『ルーブリックバンク』における適切なルーブリックを作るための支援機能の追加」
（鎌田湧暉、2018年度）